

琵琶湖東岸の湖周道路を北上し、彦根市から米原市に入ると、隣り合う朝妻、筑摩の集落にさしかかります。このあたりは琵琶湖の幅がもっとも広く、対岸の高島市まで直線距離にして約17kmあります。ここから対岸まではっきりと見渡せる日は、1年の間にそう多くはありません。

発掘調査によれば、御厨の建物跡などの明確な遺構は見られていませんが、一帯からは須恵器の壺や土師器の杯、さらに平安時代の墨書土器や緑釉陶器なども出土しており、一般集落とは異なる官衙的要素の強い遺跡であったことがわかってきます。

一方、筑摩の北側の朝妻の地には、かつて栄えた朝妻湊がありました。朝妻湊は、古代から近世にかけて湖上交通の要港としてにぎわいを見せていました。

現在は一帯が公園化され、「朝妻湊址」の石碑を残すのみとなっていますが、往時は人や物資の運搬を担う良港として発展していました。

古文書に朝妻の地名が登場するのは、永延2(988)年に記された「尾張国郡司百姓等解」の第23条で、「京都朝妻両所令運送雜物事」とあります。

この文書は、当時の尾張国

## 筑摩神社と朝妻湊



朝妻湊があったとされる湖岸に設置された石碑 一米原市

司、藤原元命が、尾張から朝妻湊を経て京の都へ物資を運搬させたことに対して、「国のために反し寒い時も休み無しで長時間働かせている。とくに馬は重い荷により蹄を傷めたり、鞍を乗せた背が傷つ

越える必要がありました。古文書にみられるように、こうした運送手段は相当な労力を消耗したと思われま

この時期に繁栄を極めた朝妻湊は、その後この地を治めた新庄氏(新庄直昌)により朝妻城が築かれ、港を守護する役割を果たしています。しかし、安土桃山時代から江戸時代にかけて長浜港や米原港が相次いで開かれたことにより、朝妻の港は徐々に衰退していったようです。

なお、考古学的に朝妻湊は見つかっていません。しかし、古代から中世にかけての筑摩、朝妻には各地から食材が集まり、天皇の食卓を彩る役割を果たしていたことがうかがえます。最近の発掘成果で官営の「物流ターミナル」だったことが明らかになってきた彦根市の六反田遺跡(12回目で紹介)と性格が似ており、関係が注目されています。

(滋賀県文化財保護協会 中川正人)

# 朝廷の「物流ターミナル」